

令和5年度 簡易裁判所判事候補者選考筆記試験問題

憲 法

- 1 違憲審査基準について論ぜよ。
- 2 次の各事項について簡潔に説明せよ。
 - (1) 裁判官の独立
 - (2) 条例の意義及び法律との関係

民 法

平成29年法律第44号（令和2年4月1日施行）による改正後の民法が適用されるものとして回答せよ。

- 1 Aは、令和4年4月、Bに対し、賃貸借期間2年間、賃料月額15万円と定めてAの所有する甲建物を賃貸し、甲建物をBに引き渡した。Bは同年7月、Cに対し、賃貸借期間1年間、賃料月額20万円と定めて甲建物を転貸し、甲建物をCに引き渡した。その後、Aは、同年11月、Dに対し、甲建物を売却し、その旨の所有権移転登記をした。

この事例におけるBD間、CD間の法律関係について、次の各場合に分けて論ぜよ。

- (1) BがAの承諾を得て甲建物をCに転貸していた場合
 - (2) BがAに無断で甲建物をCに転貸していた場合
- 2 次の各事項について説明せよ。
 - (1) 債務不履行に基づく損害賠償請求権と不法行為に基づく損害賠償請求権の異同
 - (2) 債権譲渡の対抗要件

刑 法

- 1 乙は、甲から、独居の資産家であるAの不在中にA方に侵入して金品を盗むことを提案され、賛同した。甲と乙は、Aが外出したことを確認した上、乙が準備した工具を用いてA方の玄関ドアを解錠し、同ドアを開けてA方に入った。甲と乙が玄関の土間から廊下に上がろうとしたところ、A方2階に人がいる気配がしたことから、乙は急に怖くなり、甲に「やっぱり俺は帰る。」と告げた。甲は、「それなら、俺は一人でやる。」と答え、乙はA方を立ち去り家に帰った。乙が去った後、甲は2階に上がり、たまたま在宅していたAの子Bに対し、乙に秘密で隠し持っていた包丁を突きつけた上、「金目のものを出せ。出さないと殺すぞ。」と申し向けた。Bは、恐怖のあまり、A方の金庫から現金を取り出して甲に差し出し、甲は同現金を持ち去った。

甲乙の刑事責任について論ぜよ（ただし、特別法違反の点は除く。）。

- 2 脅迫罪、恐喝罪及び強盗罪における脅迫の意義について論ぜよ。

民 事 訴 訟 法

- 1 Xは、Yに対して100万円を貸し付けたと主張して（以下「本件貸金契約」）、Yに対し、本件貸金契約に基づき、その一部である60万円の支払を求める訴訟をA簡易裁判所に提起した。以上を前提に、次の各問に答えよ。各小問は独立したものとする。
 - (1) XとYはいずれも弁済の事実を主張しなかったが、Xへの当事者尋問により、Xが100万円全額の弁済を受けていたことが明らかになった。A簡易裁判所は、どのような審理をすべきか。
 - (2) Xは本件貸金契約の成立を立証できず、請求の全部棄却判決を受け、同判決は確定した。その後、XはYに対し、本件貸金契約に基づき、残部である40万円の支払を求める訴訟をA簡易裁判所に提起した。A簡易裁判所は、どのような判決をすべきか。
 - (3) Xの本件貸金契約の成立の主張に対し、YはXに対する40万円の反対債権と相殺する旨を主張し、A簡易裁判所は、それぞれ主張に理由がある旨の心証を得た。A簡易裁判所は、どのような判決をすべきか。
- 2 次の各事項について説明せよ。
 - (1) 処分権主義
 - (2) 民事訴訟における証明と疎明

刑 事 訴 訟 法

- 1 伝聞法則の意義及び趣旨について説明した上で、次の各証拠を被告人の犯罪事実を証明する証拠として用いることの可否について、各証拠が伝聞証拠に当たるか否かにも触れつつ、論ぜよ。
 - (1) 証人甲が、被告人Aの恐喝被告事件の公判期日において、「Aが半グレグループのリーダーでとても怖い人間であることは知っているが、Aが犯行に及んだことは見たことも聞いたこともない」と証言したところ、検察官が、「甲は、捜査段階では『Aの犯行を見た』と供述していた」と主張して、甲の検察官の面前における供述を録取した書面（甲の署名・押印があるもの）の証拠請求をした場合における当該書面（ただし、弁護人はこれを証拠とすることに同意していないものとする。）
 - (2) 証人乙が、被告人BのCに対する恐喝被告事件の公判期日において、「Bが、Cに対して『Cが放火するところを見た。口止め料を払え。』と言いながら、Cから金銭を受け取っていた」と証言した場合における当該公判供述
- 2 次の各事項について簡潔に説明せよ。
 - (1) 逮捕状により逮捕した被疑者を釈放後、再び同一事実について逮捕することの可否
 - (2) 被疑者の尿及び血液を採取するために必要な令状